

発見された二百年前の

佐伯の地図

出 納 和基夫

(会員 所沢市北原町)

伊能図とは

伊能忠敬(一七四五〜一八一八)といえは、江戸時代に日本中を測量して、当時としては世界に誇るべき正確な日本地図を作成した人であり、知らない人は先ずいなと言つていいだろう。

作成された地図は四四〇種ともいわれるが、伊能図と呼ばれる全国地図は以下のものである。

伊能大図 三六、〇〇〇分の一 二二四枚

伊能中図 二一六、〇〇〇分の一 八枚

伊能小図 四三二、〇〇〇分の一 三枚

縮尺は尺貫法を用いており、大図は一町を一分で表し

ているので、きりのいい数字ではない。伊能大図の正本は、新政府になって皇居に納められていたが、明治初年の火災によって失われた。副本も東京大学が伊能家から借用中に、関東大震災によって焼失し、もう存在しないと思われていた。ところが、平成十三年三月に渡辺一郎氏が米国ワシントンの議会図書館で眠っていた伊能大図二〇七枚の写しを発見した。当時紙上で大きく報道されたので、ご記憶の人も多いと思う。その後、各所で小発見が続き、本年五月海上保安庁で発見された四枚で、すべてが揃ったのである。そのため、それらを複製して一般の閲覧に供することが可能になった。

伊能図フロア展

「アメリカ伊能図里帰りフロア展」は、二〇〇四年に全国各地で開催されてきたが、同年十二月に世田谷区日本大学文理学部でも開催され、それを見ることができた。百周年記念講堂のフロア一杯につき合わせた大図が広げられていたが、それでも北海道は入りきれずに切り離されていたほど大きかった(写真1) そのほかに、伊

能中図、小図や各地の部分図、伊能家に伝わる文書や資料、当時の測量機器等の展示、映画「伊能忠敬―子午線の夢―」上映、子孫の伊能氏による講演、地図等関連図書の販売、伊能ウオークも行うなど、さながら伊能忠敬の総合展示会の感があった。

伊能大図は透明なビニールに被われていて、その上を歩いて日本中を旅する気分で見ることができるようになっていた。九州さらに豊後あたりをゆっくり観察し、現場で写真も撮影したのだが、天井の照明の反射がじゃまになり、接写レンズを持ち合わせてなかったこともあって、文字などうまく写しとれなかった。そのため大図を掲載した資料本を購入したのだが、佐伯付近は掲載されなかった。よって複製大図の佐伯付近を注文して購入した(図1、図2)。

伊能図の中の佐伯

伊能大図の豊後部分は、一八一〇年の測量である。それ以後の正確な地図は一九〇五年(明治三八年)の五万分の一地形図までないわけであるから、伊能図は約二〇



フロア展 (写真1)

○年前の佐伯を知ることができる唯一の正確な地図ということになる。その地図に描いてあることを見てみよう。

①城山・石垣の上に二層の建物が二つと、その下に三つの屋根が描かれている。城山の城郭と城下町であろう。伊能図に描かれている姫路城や松本城など現存する城は、天守や石垣を實在に近く描き分けている。また全国で同一の城の絵はないことや、「お城はとくに入念に景観を描写した(文献④)」とあるように、鶴屋城もスケッチ程度であったとしてもこんな感じで眺められたのではなからうか。

②集落地名…「佐伯」に始まり北の方に向かって鶴屋、塩屋村蟹田、塩屋村臼杵(坪)村、下野村坂野浦、海崎村百枝、海崎村、戸穴村、狩生村、古江浦、啼干浦、波太、浅海井浦、津井浦、蒲戸崎などが並ぶ。大入島は石間浦、守後浦、久保浦、片神浦、荒網代浦など。市街地の西から南にかけては長瀬村、久部村、堅田村城村、久部村蛇崎、柏江村、津志河内村、小島、木立村須留木、木立村、大船繫、大江灘、三九郎谷、塩屋村分郷、屋敷、吹浦、大河原、鯛網代、地松浦、沖松浦、桑野浦、日野浦、間越、丹賀浦、梶寄浦など。

③島地名…大入島、八島、大島など。中洲では長島、中方島、沖方島、女島など。

④河川地名…中江川、大江灘川。

⑤山地名…釈間山、彦岳、海崎竜(?)王。

地名のうち、塩屋村臼杵村は位置的に臼坪のことか。釈間山は尺間山であろう。海崎竜王と読める山が海崎と戸穴の背後にあるが、そのあたりは二〇〇〜四〇〇m程度の低山なので現在の地図には記載がない、地元の方なら分かるのではなからうか。

※海崎に龍王山あり

地形の変化

さて、測量時の地形が現在どのようになつたであろうか。それを知るために平成十四年発行の五万分の一地形図に、伊能図を重ね描きしてみた(図3)。二つの地図は、縮尺を同じにすれば驚くほどびつたりと重なるので、地形のちがいは明確に分かる。その主なちがいは次の通りである。

①堅田川河口に二つの島が描かれている。

②木立川河口部に大きな湾入がある。

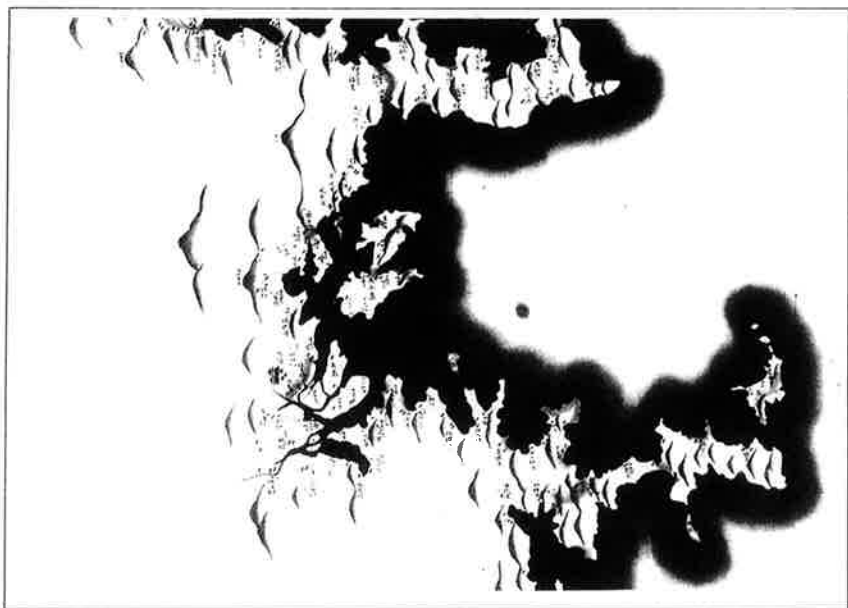


図1 伊能大図佐伯付近

③番匠川の下流が大江灘川となっている。
④長島川（現中川）の幅が広い。

堅田川の河口の島のうち、北側の島は字が不鮮明であるが柳□島と読める。これは明治の地図では陸続きとなっている。南側のトヤ島はごく最近まで島であったが現在は陸続きである。

木立川河口の湾入は明治頃にはすでに現在のように細い川となって水田化している。

大江灘川は見づらいが現上灘あたりの河中に記入されている（元図は海陸の境界が細い線で見えにくいため、復元に際して海岸を青く縁取った。そのため海中に書かれた文字はコピーに写らない）。当時は航路として利用された川筋は、明確に区別する必要があるので、大江灘川、中江川など呼び分けていたのであるが、番匠川の文字が出ていない。このことは少なくとも河口部あたりは当時番匠川と呼ばれていなかったようである。伊能測量隊は、第四次終了後に東日本地図を第十一代將軍家斉の上覧に供した。これを機に、西日本の測量も命じられ、身分も浪人扱いから幕臣に取り立てられ、九州に入る頃は堂々たる幕府直轄の測量隊になっていた。各藩は老中

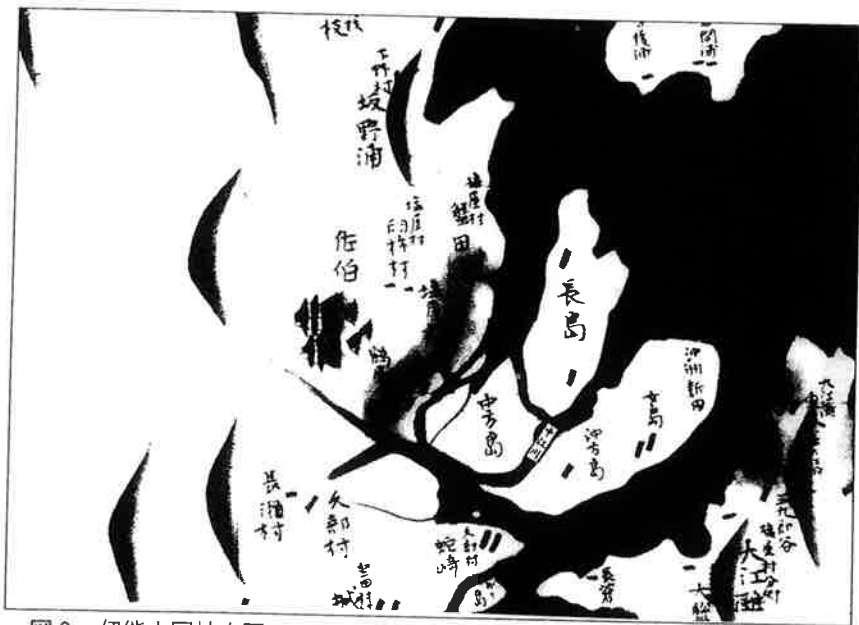


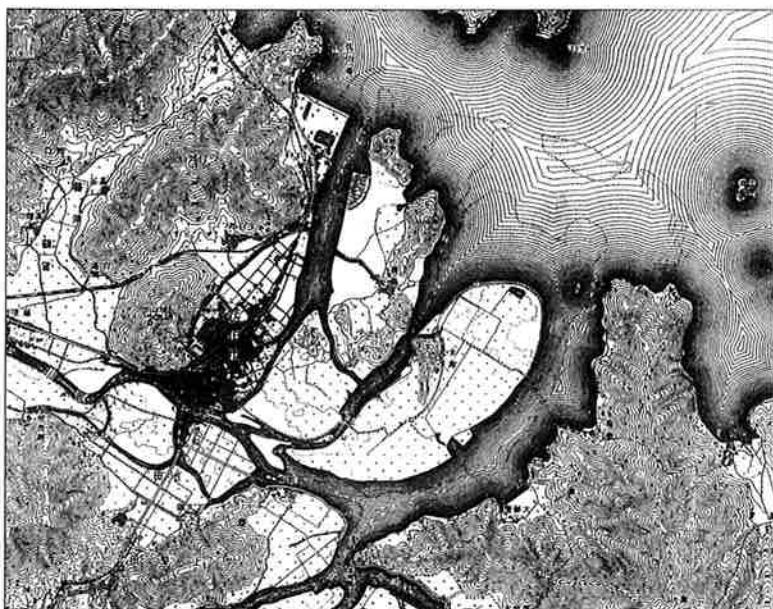
図2 伊能大図拡大図

の命により協力するようになっていたから、情報も充分聴取していたはずで、複製時の誤写は別として地名の聞き誤りなどということはないと考えていい。

ただ伊能図は海岸地形を明らかにするのが主目的だったため、分流が始まる池船あたりより上流側はスケッチで描くにとどめ、地名も省かれている。そのため上流の方を当時番匠川という名で呼んでいたかどうか、あるいは番匠川はもつと時代が下って使われ始めたのかわろか、などは伊能図を見る限りでは分からない。

中江川と大江灘川は対の地名になっているのかわろ知らない。長島川の名は書かれていないが、馬場付近に切込んだ水路があり、突き当たってから現中央通りに沿うように南北に分かれ、北は臼坪へ、南は船頭町あたりに抜けるような細い水路が描かれている。

中洲の長島は変わっていないが、芳島（現中の島）は中方島となっており、女島の上流側は冲方島となっており、対の地名である。このことは中方島の市街地側にはさらに「方島」とも呼ぶべき島があることを示唆する。それは当時水路で隔てられて、島状だった現向島あたりであろうか。



昭和2年測図

なお現女島には上流から沖方島、女島、沖洲新田と三つの地名がある。二つの島地名があるのは、それ以前は別々の島であったものが、土砂の堆積で繋がった可能性がある。また、下流側が、開墾されていた様子が見える。

測量の詳細など

さて、この佐伯付近の地図作成時期であるが、資料によると第一次として東北地方に出発したのが寛政十二年（一八〇〇）、以後北海道から一転南下して九州に入ったのが第七次あたり、江戸を文化六年（一八〇九）八月に出発し、翌文化七年に九州東岸を回っている。

その測量の記録は詳細なものが残っており、佐伯付近では次表のようになっている。

この日記については、佐伯史談第一九四号に橋迫照氏が詳しく解説されているので省略する。（なお同氏は写本日記の「波石」をハエではないかとして、「磬」字について言及しておられる。この磬字は、伊能図の茶屋が鼻と大船繋の間に、「長磬」が記されており、当時使われてい

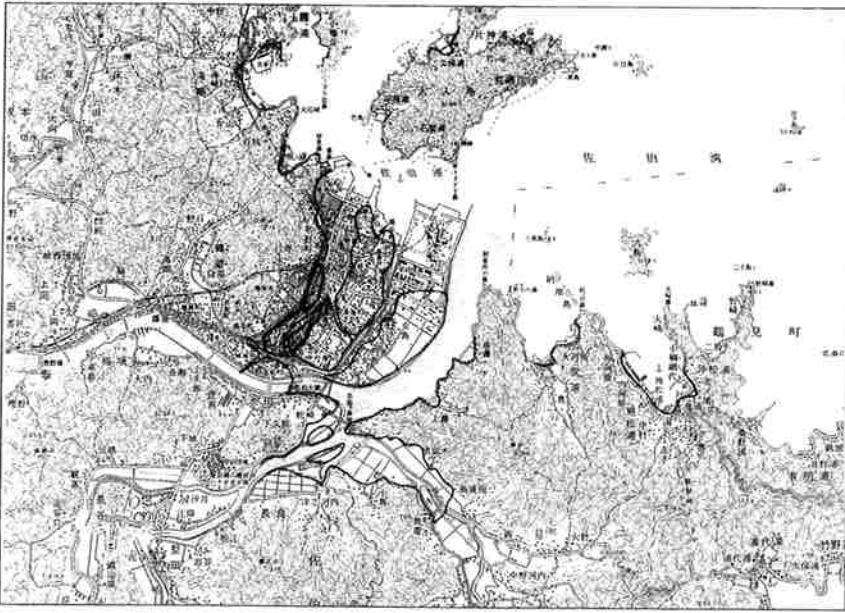


図3 新旧地図重ね描き図

たことは確かのような。現在の五万分の一地形図では、ハエは鶴見町の「聯研(ばえ)」「鶺鴒ノ研」のように使われている。高知県須崎市では濬(はえ)を岩礁の意として使い、「須崎」図には鶺鴒ノ濬(うのはえ)など二〇に及ぶ濬地名が記載されているので、氏のお説の通りであろう。

以上のように、今まで佐伯の正確な地図は約一〇〇年前の明治三八年(日露戦争日本海海戦の年)の地形図が最初だったのであるが、このようにそれより約百年も前の正確な地図が、最近になって世に現れたのは、まことにありがたいことであった。これを機に佐伯在住の方々の検証が進むことを願い、またご意見を頂ければ幸いである。

表1

文化7年 (1810)				
月 日	宿 泊 地	旧市町村	宿 泊 宅	新 暦
3月1日～2日	鳩浦	津久見市	立法寺	4/4～4/5
3日	津井浦	上 浦 町	真宗寺	
4日	大入島高松浦	佐 伯 市	大休庵 十兵衛	
5～6日	古江浦	〃	儀兵衛 三佐衛門	
7～11日	佐伯城下	〃	宮崎儀右衛門 栗屋新佐衛門	
12～14日	地松浦	鶴 見 町	嘉佐衛門 平蔵	
15～18日	円賀浦*	〃	甚十郎 源太郎	
19～21日	色利浦	米水津村	御手洗与七郎	
22～26日	畑野浦	蒲 江 町	富田達右衛門	
27～4月1日	蒲江泊浦	〃	御手洗寿蔵	4/30～5/30

*円賀浦は丹賀浦の誤記と考えられる (資料③による)。

【参考文献】

- ①伊能忠敬の歩いた日本 渡辺一郎 ちくま新書 一九九四
- ②図説 伊能忠敬の地形図を読む 渡辺一郎 河出書房新社 二〇〇〇
- ③伊能忠敬の足跡―伊能忠敬銅像建立報告書― 伊能忠敬銅像建立実行委員会 二〇〇二
- ④伊能忠敬測量隊 渡辺一郎 編著 小学館 二〇〇三
- ⑤アメリカにあった伊能大図とフランスの伊能中図
アメリカ伊能大図展実行委員会 二〇〇四
- ⑥伊能大図 第一八三番 豊後(佐伯・白杵・津久見・島浦島)
二〇〇四

【追記】佐伯史談第一九四号「古地形図に見る佐伯の変遷」六Pに「浅海井方面の土建屋の木村さん」と書いたのは、「津井の樹村さん」であると、御親戚筋の山本正直会員から御教示があったよし、また第一九五号(三五P)に林寅喜会員が同様の主旨を記載されているので、そのように訂正致します。有難うございました。